

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語諸方言における持続体系の変化と地理的分布

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2026-01-23 キーワード (Ja): 日本語, 方言, アスペクト, 言語変化, 地理的分布 キーワード (En): Japanese, dialects, aspect, language change, geographical distribution 作成者: 鴨井, 修平 メールアドレス: 所属: 甲南女子大学
URL	https://doi.org/10.15084/0002000595

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



日本語諸方言における持続体系の変化と地理的分布

鴨井修平

甲南女子大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿は、日本語諸方言において、持続体系の変化が生じている場所を地理的分布に基づいて示したものである。本稿では、まず、日本語諸方言の持続形式 =joru, =toru, =teru のアスペクト機能に基づいて持続体系の類型化を行った。また、持続形式の機能重複という持続体系の変化プロセスにおける一過程を量的に分析し、当該現象に関わる方言がどのような分布を成しているのかについて、地理情報システム (Geographic Information System (GIS)) による可視化を行った。本稿は、これらの研究成果に基づいて「言語変化はどのような場所で生じるのか」という言語地理学の研究課題に貢献する*。

キーワード：日本語、方言、アスペクト、言語変化、地理的分布

1. はじめに

日本語諸方言における持続形式の分布を見ると、図1のように東日本諸方言 (図1: 分割線右側) には =teru (TERU) の1形式、西日本諸方言 (図1: 分割線左側) には =joru (YORU), =toru (TORU), TERU の3形式が分布している¹。

* 本稿は、筆者が2023年4月–2025年3月までの間、日本学術振興会特別研究員 -PD (国立国語研究所) として取り組んでいた研究課題「日本語諸方言の持続形式における総合的研究」における研究成果の一部である。本研究にご協力いただいた多くのインフォーマントの皆様へ感謝申し上げます。また、本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」(プロジェクトリーダー：小木曾智信) のサブプロジェクト「言語資源の空間接続」(プロジェクトリーダー：大西拓一郎) の公開研究発表会 (2024年2月22日) における発表資料を元に執筆したものである。本発表に際し、貴重なご助言を賜った共同研究員各位に感謝申し上げます。なお、本研究は、JSPS 科研費 JP23KJ2152 の助成を受けている。

¹ 本研究では、=joru, =toru, =teru をそれぞれ接語 (clitic) として扱う。=joru には [jooru], [joo], [juu] などの音形変種があるが、本稿では、これらを YORU として統一的に表記する。また、=toru には [toofu], [too], [tcuu] などの音形変種があるが、本稿では、これらを TORU として統一的に表記する。これに伴い、音形変種のない =teru も TERU として統一的に表記する。なお、発話例を示す際には、各方言の音形に基づいて簡易的な音韻表記を行う。

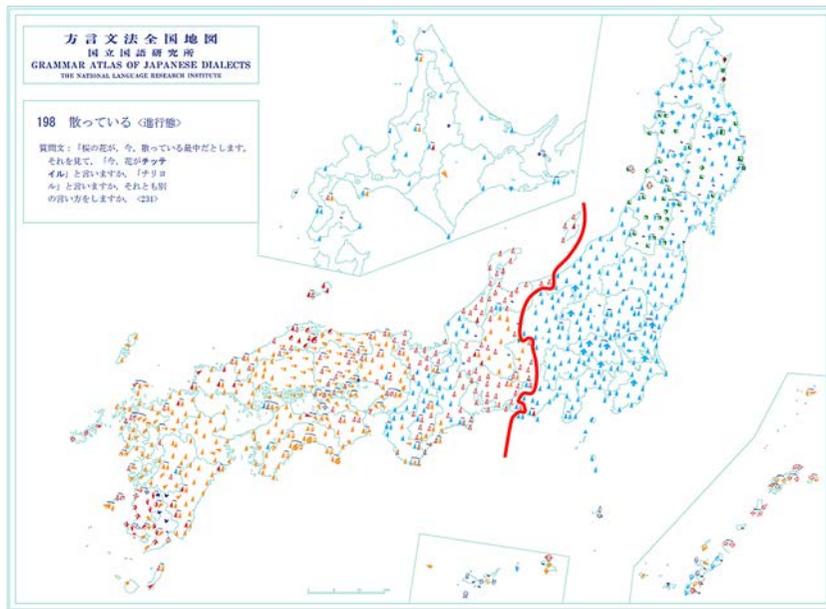


図1 進行相の分布

(国立国語研究所 (1999) 『方言文法全国地図 第4集—表現法編1—』 198 図に追記)²

東日本諸方言は、TERUが進行 (progressive) と結果 (resultative) を標示するという点で標準語との類似点を持つ。(1) は、東日本諸方言に所属する東京方言の話者による発話例である³。

- (1) a. neko=ga sakana tabe=teru.
猫=NOM 魚 食べる=PROG.NPST
「猫が魚を食べている。」
- b. neko=ga sakana tabe=teru.
猫=NOM 魚 食べる=RES.NPST
「猫が魚を食べ終わっている。」

(1a) と (1b) は、TERUは、進行と結果を標示するというを示している。一方、西日本諸方言は、YORUが進行、TORUが結果を標示するという点で標準語との相違点を持つ。(2) は、西日本諸方言に所属する高知方言の話者による発話例である。

- (2) a. neko=ga sakana tabe=juu.
猫=NOM 魚 食べる=PROG.NPST

² 分割線は、西日本諸方言の持続形式である YORU と TORU の分布域を指標として筆者が加筆したものである。実際、分割線の位置には、飛騨山脈、木曾山脈、赤石山脈 (日本アルプス) が聳えており、地理的にも東日本諸方言と西日本諸方言の境界が窺える。

³ 提示する発話例に関して、1 段目は形態素解析を行わない簡易の音韻表記、2 段目はグロス、3 段目は標準語訳である。本稿では、YORU、TORU、TERU をそれぞれ接語 (clitic) として扱うため、動詞との境界を = で示した上で、各形式に対して連続的にグロスを付す (グロスの略号は稿末参照)。

「猫が魚を食べている。」

- b. neko=ga sakana tabe=tçuu.
猫 =NOM 魚 食べる =RES.NPST

「猫が魚を食べ終えている。」

(2a) と (2b) は、YORU と TORU は、進行と結果を区別するというを示している。工藤 (1995) 以来、日本語諸方言の持続形式に関する研究は活発化したため、持続形式の意味機能に関しては、言語学、日本語学、方言学の分野を通して豊富な研究蓄積がある (津田 2013, 工藤 2014)。

1.1 日本語諸方言における持続体系の変種

個別方言の持続体系における研究蓄積により、日本語諸方言に YORU, TORU, TERU を中心とした様々な持続体系の変種が存在するということが明らかになっている。持続形式の分布から見れば、日本語諸方言は、近畿地方を中心に、YORU と TORU が分布の大半を占める近畿地方以西の方言と、TORU と TERU が分布の大半を占める近畿地方以東の方言に分類できる。一方、関東地方以東の方言では、基本的に TERU の 1 形式によって持続体系が成立しているため、変種が存在しない (国立国語研究所 (編) (1999) 『方言文法全国地図 第 4 集—表現法編 1—』 198-202 図)。

日高 (2008), 小林 (2014), 工藤 (2014), 鴨井 (2020) などによれば、持続体系の変種は、伝統形式の文法化によるアスペクト機能の変化や、言語接触による非伝統形式の伝播によって生じる。前者は、言語内的要因による変化 (内的変化) であり、変化のスピードは比較的遅い傾向にある。後者は、言語外的要因による変化 (外的変化) であり、変化のスピードは比較的速い傾向にある (大西 2016, 2023)。スピードの異なる両者が複雑に交錯しているため、各方言の異なる変化プロセスにおいて、様々な持続体系の変種が観察されるということである。

近畿地方以西には YORU と TORU が広く分布しているが、例えば、次に示す大分県佐伯市方言と岡山県赤磐市方言では、持続体系が異なる。まず、(3) は大分県佐伯市方言のインフォーマントによる発話例である。

- (3) a. taro ima hasiri=jon. /*hasit=tçon.
太郎 今 走る =PROG.NPST
「太郎 (は) 今, 走っている。」
- b. taro moo hasit=tçon. /*hasiri=jon.
太郎 もう 走る =RES.NPST
「太郎 (は) 既に, 走っている。」

(3a) と (3b) は、進行を標示する形式は YORU, 結果を標示する形式は TORU であるということを示している。(3a) と (3b) のような YORU と TORU の意味機能における相違のように、一方の形式にある機能が他方の形式にない場合、2つの形式は機能的に対立していると言える。

ここで本研究では「機能対立」という用語を定義する。

(4) 機能対立

- a. 当該方言に複数の持続形式が存在することを前提として生じる。
- b. 当該方言に複数の持続形式が存在しない場合には生じない。
- c. 一方の形式にある機能が他方の形式にない場合に生じ得る。
- d. 一方の形式にある機能が他方の形式にもある場合には生じ得ない。

(3) の大分県佐伯市方言では、YORU と TORU の間で機能対立が生じているということである。次に、(5) は岡山県赤磐市方言のインフォーマントによる発話例である。

- (5) a. taro ima hasir=jooru. / hasit=toru.
太郎 今 走る =PROG.NPST / 走る =PROG.NPST
「太郎 (は) 今, 走っている。」
- b. taro moo hasit=toru. / *hasir=jooru.
太郎 もう 走る =RES.NPST
「太郎 (は) もう, 走り終えている。」

(5a) と (5b) は、進行を標示する形式は YORU と TORU、結果を標示する形式は TORU であるということを示している。(5) では、YORU と TORU のように複数の持続形式が存在した上で、TORU は進行と結果のアスペクト機能を有するために、進行の場合は対立が生じず、曖昧性があると言える。ここで本研究では「機能重複」という用語を定義する。

(6) 機能重複

- a. 当該方言に複数の持続形式が存在することを前提として生じる。
- b. 当該方言に複数の持続形式が存在しない場合には生じない。
- c. 一方の形式にある機能が他方の形式にもある場合に生じ得る。
- d. 一方の形式にある機能が他方の形式にない場合には生じ得ない。

(5) の岡山県赤磐市方言では、YORU と TORU の機能重複が生じているということである。このような大分県佐伯市方言と岡山県赤磐市方言の例は、近畿地方以西において、持続体系の変種があるということを示している。

一方、近畿地方以东には TORU と TERU が広く分布しているが、例えば、次に示す福井県敦賀市方言、長野県佐久市方言、愛知県名古屋市方言では、持続体系が異なる。まず、(7) は福井県敦賀市方言のインフォーマントによる発話例である。

- (7) a. taro ima hasit=toru.
太郎 今 走る =PROG.NPST
「太郎 (は) 今, 走っている。」

- b. taro moo hasit=toru.
太郎 もう 走る =RES.NPST
「太郎 (は) もう, 走り終えている。」

(7a) と (7b) は, 進行を標示する形式と結果を標示する形式は, 共に TORU であるということを示している。(7) のように, 近畿地方以東には, TORU という 1 形式のみを使用する方言が存在する。YORU と TORU という 2 形式を使用する方言と異なり, 福井県敦賀市方言には, 複数の持続形式が存在しないため, これを前提とする機能対立や機能重複は生じない。次に, (8) は長野県佐久市方言のインフォーマントによる発話例である。

- (8) a. taro ima hasit=teru.
太郎 今 走る =PROG.NPST
「太郎 (は) 今, 走っている。」
b. taro moo hasit=teru.
太郎 もう 走る =RES.NPST
「太郎 (は) もう, 走り終えている。」

(8a) と (8b) は, 進行を標示する形式と結果を標示する形式は, 共に TERU であるということを示している。(8) のように, 近畿地方以東には, TERU という 1 形式のみを使用する方言が存在する。YORU と TORU という 2 形式を使用する方言と異なり, 長野県佐久市方言には, 複数の持続形式が存在しないため, これを前提とする機能対立や機能重複は生じない。一方, (9) は愛知県名古屋市方言のインフォーマントによる発話例である。

- (9) a. taro ima hasit=toru. / hasit=teru.
太郎 今 走る =PROG.NPST / 走る =PROG.NPST
「太郎 (は) 今, 走っている。」
b. taro moo hasit=toru. / hasit=teru.
太郎 もう 走る =RES.NPST / 走る =RES.NPST
「太郎 (は) もう, 走り終えている。」

(9a) と (9b) は, 進行を標示する形式と結果を標示する形式は, 共に TORU と TERU であるということを示している。(9) では, TORU と TERU のように複数の持続形式が存在した上で, TORU と TERU は進行と結果のアスペクト機能を有するために両者を区別できず, 曖昧性があると言える。(9) の愛知県名古屋市方言では, TORU と TERU の機能重複が生じているということである。このような福井県敦賀市方言, 長野県佐久市方言, 愛知県名古屋市方言の例は, 近畿地方以東においても, 持続体系の変種があるということを示している。

工藤 (2014) や鴨井 (2020) のような通言語学的な立場から見れば, 近畿地方以西の諸方言における持続体系の変種は, 結果を標示する TORU のアスペクト機能が, 進行まで拡張したこと

によって生じたと考えられる。つまり、岡山県赤磐市方言のような持続体系は、元来、大分県佐伯市方言のような持続体系を成していたということである。一方、日高（2008）や小林（2014）のような言語地理学的な立場から見れば、近畿地方以東の諸方言における持続体系の変種は、TORU を中心とした持続体系と TERU を中心とした持続体系が接触したことによって生じたと考えられる。つまり、愛知県名古屋市方言のような持続体系は、元来、福井県敦賀市方言もしくは長野県佐久市方言のような持続体系を成していたということである。日本語諸方言における持続体系の変種には、このような内的変化と外的変化の2つの変化が関係していると考えられるが、持続体系の具体的な変化プロセスや変化が生じる場所についての研究は少ない。

1.2 問題提起

本研究の目的は、日本語諸方言において、持続体系の変化が生じている方言を明らかにし、それらの地理的分布に基づいて、言語変化が生じる場所を可視化することである。前述の持続体系の変種における2つの変化プロセスでは、多くの場合、持続形式の機能重複が観察される。近畿地方以西の諸方言のように、結果を標示する TORU のアスペクト機能が、進行に拡張すれば、元来、進行を標示する YORU との間で機能重複が生じる。同様に、近畿地方以東の諸方言のように、進行と結果を標示する TORU を中心とした持続体系と、進行と結果を標示する TERU を中心とした持続体系が接触すれば、当該方言における伝統形式と非伝統形式の間で機能重複が生じる。ここで、持続形式の機能重複は、持続体系の変化プロセスの一過程であるということが分かるが、機能重複はどのような場所で生じているのかという問題が生じる。また、津田（2023）が指摘しているように、日本語アスペクトの研究史的に、持続形式という特定の形式と地理的分布の関係性について言及される機会が多いが、持続体系という文法的枠組みと地理的分布の関係性について言及される機会が少ない。このように、持続体系の変化が、地理的連続性に従って生じているかどうかは不明瞭であるため、本研究では、持続体系の変化プロセスの一過程である機能重複が、どのような場所で生じているのかを明らかにする。

2. 研究方法

本研究の目的を達成するためには、持続体系を構成する YORU, TORU, TERU のアスペクト機能を分析するための統一的枠組みが必要である⁴。

2.1 データ分析の枠組み

本研究では、YORU, TORU, TERU のアスペクト機能を分析するための統一的枠組みとして、図2に示すような2種類の事態を設定する⁵。事態 α （図2：左）における主な動詞は継続動詞で

⁴ 本研究における方法論は、筆者の博士論文と同様の方法論である（鴨井 2023: 17-18）。

⁵ 事態を2種類とする根拠は、金田一（1950）と Vendler（1967）の動詞分類にある。原則として、時間構造を持つ動詞は、継続的なもの（走る、焼く）と瞬間的なもの（死ぬ、消える）の2種類に大別され、それ以外の動詞は、状態的なもの（ある、似る）である。

あり、動作・変化の過程が継続的であるという性質を持つ。事態 β （図2：右）における主な動詞は瞬間動詞であり、動作・変化の過程が瞬間的であるという性質を持つ。

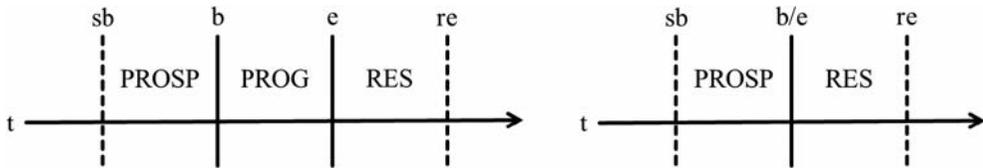


図2 事態 α ・事態 β

図2より、「t」は時間 (time), 「sb」は開始兆候点 (signal of beginning), 「b」は開始点 (beginning), 「e」は終了点 (ending), 「re」は結果終了点 (result ending) である。事態 α は、時間の経過に伴い、開始兆候点から開始点までの将然 (prospective), 開始点から終了点までの進行 (progressive), 終了点から結果終了点までの結果 (resultative) を順行するという時間構造である。例えば、「魚を食べる」という事態は、「食卓に着く >> 魚を口へ運び、咀嚼する >> 魚を食べ終え、骨が残る」というように変化していく。事態 β は、時間の経過に伴い、開始兆候点から開始/終了点までの将然、開始/終了点から結果終了点までの結果を順行するという時間構造である。例えば、「椅子に座る」という事態は、「椅子の前に立ち、膝を曲げる >> 椅子にお尻が付き、姿勢が安定する」というように変化していく。本研究では、このような2種類の事態をデータ分析の枠組みとして設定する。

2.2 データ収集の枠組み

本研究では、標本調査の方法論に基づいて、方言を構成するインフォーマントを対象に、一定数以上のデータを収集することで、質的かつ量的に客観性の高い言語事実を提示する。図3に示すように、母集団である方言Xの全体像は、標本である方言Xを母語とする各地域、各年齢層のインフォーマントによって特徴付けられる。

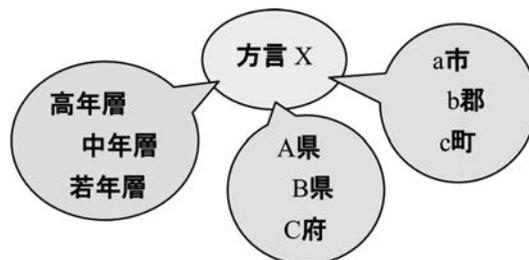


図3 方言Xの構成イメージ

図3より、例えば、大阪方言の全体像は、大阪市、八尾市、堺市などの各市を出身地とする高年層、中年層、若年層のインフォーマントによって特徴付けられる。本研究では、このような標

本調査の方法論をデータ収集の枠組みとして設定し、日本語諸方言における方言データを収集する。また、このデータ収集の枠組みにより、地理的差異と時間的差異による方言差を網羅することができる。

本研究では、図4に示す24府県の方言データを獲得している。



図4 24の調査実施府県

ただし、現段階では、九州諸方言における持続体系の記述が中途であるため、本研究では、24府県の内、福岡県、大分県の2県を除外した22府県を分析の対象とする。無論、九州諸方言を含めた分析は、今後の課題である。

3. 方言データの分析

本節では、日本語諸方言において観察される持続体系の変種を提示していく。また、方言データを量的に分析し、持続形式の機能重複および持続体系の変化が生じている方言を明らかにする。特に、持続体系の変化は、高年層から若年層にかけて生じているため、最も新しい持続体系を成している若年層を代表例として提示していく。

本研究では、まず、先行研究の方言区画を参考に、第一段階のデータ収集を行い、方言区画による方言差を観察した⁶。次に、第一段階のデータ収集の結果に基づいて、方言差が観察されない方言区画を統合し、第二段階のデータ収集を行った。本節以降に提示するデータは、第二段階のデータ収集の結果に基づいている。また、本節では、近畿地方からは大阪方言、中国地方からは岡山方言、四国地方からは高知方言、中部地方からは愛知方言を抜粋し、各地方の代表的な持続

⁶ 本稿では、方言区画による持続体系の相違を方言差とする。

体系の変種として提示していく。各方言からは、アスペクトに関する興味深い現象も観察されるが、本稿では、持続形式の機能重複を中心とした議論を展開していくため、当該現象における詳細を割愛する。

3.1 大阪方言の持続体系における機能重複

本節では、大阪方言の若年層の持続体系において、機能重複が観察されるかどうかを検証する。大阪方言における調査概要は次の通りである。なお、アスペクトに関しては、方言区画による方言差は観察されなかった。

■方言区画（野間 2014: 102）

摂津方言 / 三島方言 / 能勢方言 / 北・中河内方言 / 南河内方言 / 泉北方言 / 泉南方言

■インフォーマント

高年層 24 名 / 中年層 19 名 / 若年層 39 名

まず、事態 α における調査結果は、次の通りである。

表 1 事態 α の未然におけるデータ—大阪方言・若年層—⁷

Verb	Property	[α] Situation : Realis-Prospective	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回しているAがいた。(Aは走る直前)	25	3	4	14	39
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、フライパンに油をひき、トレーから肉を取り出しているAがいた。(Aは肉を焼く直前)	21	11	14	18	
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、空がどんより曇っていて、ジメジメしていた。(雨が降る直前)	22			17	
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、机の上の資料に目を通し始めているAがいた。(Aは作戦を考える直前)	22	7	11	17	

表 2 事態 α の進行におけるデータ—大阪方言・若年層—

Verb	Property	[α] Situation : Progressive	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、走っている最中のAがいた。(Aは走っている最中)	3	35	39		39
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、肉を焼いている最中のAがいた。(Aは肉を焼いている最中)	4	33	39		
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、雨が降っている最中だった。(雨が降っている最中)	4	30	38	1	
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、作戦を考えている最中のAがいた。(Aは作戦を考えている最中)	7	34	36		

⁷ 表の各列について、「Verb」は「動詞」、「Property」は「動詞の性質」、「Situation」は「事態の局面」、「n/a」は「その他」、「info」は「インフォーマント」を示す。なお、動詞の性質と選定に関しては、金田一（1950）、Vendler（1967）、工藤（1995）の動詞分類を参考にしている。

表3 事態αの結果におけるデーター大阪方言・若年層一

Verb	Property	[α] Situation : Resultative	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、100 m走を終えて休憩しているAがいた。(Aは既に走った後)	1	32	37	1	39
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、焼き終えた肉を皿へ移しているAがいた。(Aは既に肉を焼いた後)	1	28	33	6	
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、地面が濡れ、水たまりができていた。(雨は既に降った後)	1	23	23	14	
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、作戦会議を終えて資料を片付けているAがいた。(Aは既に作戦を考えた後)	3	27	29	10	

表1の将然では、事態内容によってバラツキはあるものの、主にYORUの1形式が選択されているのに対し、表2の進行、表3の結果では、主にTORUとTERUの2形式が選択されている。事態αにおいては、進行と結果でTORUとTERUの機能重複が生じているということである。

次に、事態βにおける調査結果は、次の通りである。

表4 事態βの将然におけるデーター大阪方言・若年層一

Verb	Property	[β] Situation : Realis-Prospective	YORU	TORU	TERU	n/a	info
座る	主体変化 意志的	朝礼前、教室に入ると、荷物を置いて、椅子を引き出しているAがいた。(Aは座る直前)	24	4	7	15	39
死ぬ	主体変化 非意志的	朝、玄関を出ると、ひどく痙攣しているネズミがいた。(ネズミは死ぬ直前)	20	4	4	19	
消える	主体変化 無生物	放課後、教室に入ると、ストーブの火がとても弱くなっていて、消えていっている様子だった。(火が消える直前)	22			17	
消す	主体動作 客体変化	放課後、教室に入ると、ストーブのスイッチに手を伸ばしているAがいた。(Aは火を消す直前)	22	9	10	17	
晴れる	自然現象	午後、部屋のカーテンを開けると、雨が上がっていて雨雲の隙間から太陽が見え始めていた。(晴れる直前)	19	4	6	20	

表5 事態βの結果におけるデーター大阪方言・若年層一

Verb	Property	[β] Situation : Resultative	YORU	TORU	TERU	n/a	info
座る	主体変化 意志的	朝礼前、教室に入ると、既に席に着いているAがいた。(Aは既に座った後)	4	30	36	2	39
死ぬ	主体変化 非意志的	朝、玄関を出ると、ネズミが1匹死んでいった。(ネズミは既に死んだ後)		33	39		
消える	主体変化 無生物	放課後、教室に入ると、点いているはずのストーブの火が消えていた。(火は消えた後)		33	37	2	
消す	主体動作 客体変化	放課後、教室に入ると、ストーブの火を消し終えて換気をしているAがいた。(Aは既に火を消した後)	3	32	33	4	
晴れる	自然現象	午後、部屋のカーテンを開けると、雲ひとつない青空になっていた。(既に晴れた後)	2	31	39		

表4の将然では、事態内容によってバラツキはあるものの、主にYORUの1形式が選択されているのに対し、表5の結果では、主にTORUとTERUの2形式が選択されている。事態βにおいては、結果でTORUとTERUの機能重複が生じているということである。

大阪方言については、YORUが卑罵、TORUが軽卑の意味を含意するため(井上1998: 153-154)、YORUとTORUによって標示されるアスペクトは、純粋なアスペクトではない。本研究

では、持続形式と待遇の関係については言及しないが、なぜ西日本諸方言において広く持続形式として使用されている YORU と TORU が、大阪方言では卑罵や軽卑などの待遇を含意するのかという問題については、今後も追求していく必要がある（鴨井 2023）。

3.2 岡山方言の持続体系における機能重複

本節では、岡山方言の若年層の持続体系において、機能重複が観察されるかどうかを検証する。岡山方言における調査概要は次の通りである。なお、アスペクトに関しては、方言区画による方言差は観察されなかった。

■方言区画（小嶋 2017: 105）

美作方言 / 備前方言 / 備中北部方言 / 備中南部方言

■インフォーマント

高年層 20 名 / 中年層 20 名 / 若年層 20 名

まず、事態 α における調査結果は、次の通りである。

表 6 事態 α の未然におけるデーター岡山方言・若年層一

Verb	Property	[α] Situation : Realis-Prospective	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回しているAがいた。(Aは走る直前)	20	12			20
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、フライパンに油をひき、トレーから肉を取り出し出しているAがいた。(Aは肉を焼く直前)	20	14			
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、空がどんより曇っていて、ジメジメしていた。(雨が降る直前)				20	
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、机の上の資料に目を通し始めているAがいた。(Aは作戦を考える直前)	20	12			

表 7 事態 α の進行におけるデーター岡山方言・若年層一

Verb	Property	[α] Situation : Progressive	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、走っている最中のAがいた。(Aは走っている最中)	20	20			20
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、肉を焼いている最中のAがいた。(Aは肉を焼いている最中)	20	20			
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、雨が降っている最中だった。(雨が降っている最中)	20	20			
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、作戦を考えている最中のAがいた。(Aは作戦を考えている最中)	20	20			

表 8 事態 α の結果におけるデーター岡山方言・若年層一

Verb	Property	[α] Situation : Resultative	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、100 m 走を終えて休憩しているAがいた。(Aは既に走った後)		20			20
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、焼き終えた肉を皿へ移しているAがいた。(Aは既に肉を焼いた後)		20			
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、地面が濡れ、水たまりができていた。(雨は既に降った後)		20			
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、作戦会議を終えて資料を片付けているAがいた。(Aは既に作戦を考えた後)		20			

表 6 の将然、表 7 の進行では、YORU と TORU の 2 形式が選択されているのに対し、表 8 の結果では、TORU の 1 形式が選択されている。事態 α においては、将然と進行で YORU と TORU の機能重複が生じているということである。

次に、事態 β における調査結果は、次の通りである。

表 9 事態 β の将然におけるデーター岡山方言・若年層一

Verb	Property	[β] Situation : Realis-Prospective	YORU	TORU	TERU	n/a	info
座る	主体変化 意志的	朝礼前、教室に入ると、荷物を置いて、椅子を引き出しているAがいた。(Aは座る直前)	20				20
死ぬ	主体変化 非意志的	朝、玄関を出ると、ひどく痙攣しているネズミがいた。(ネズミは死ぬ直前)	20				
消える	主体変化 無生物	放課後、教室に入ると、ストーブの火がとても弱くなっていて、消えていっている様子だった。(火が消える直前)	20				
消す	主体動作 客体変化	放課後、教室に入ると、ストーブのスイッチに手を伸ばしているAがいた。(Aは火を消す直前)	20				
晴れる	自然現象	午後、部屋のカーテンを開けると、雨が上がっていて雨雲の隙間から太陽が見え始めていた。(晴れる直前)	20				

表 10 事態 β の結果におけるデーター岡山方言・若年層一

Verb	Property	[β] Situation : Resultative	YORU	TORU	TERU	n/a	info
座る	主体変化 意志的	朝礼前、教室に入ると、既に席に着いているAがいた。(Aは既に座った後)		20			20
死ぬ	主体変化 非意志的	朝、玄関を出ると、ネズミが1匹死んでいた。(ネズミは既に死んだ後)		20			
消える	主体変化 無生物	放課後、教室に入ると、点いているはずのストーブの火が消えていた。(火は消えた後)		20			
消す	主体動作 客体変化	放課後、教室に入ると、ストーブの火を消し終えて換気をしているAがいた。(Aは既に火を消した後)		20			
晴れる	自然現象	午後、部屋のカーテンを開けると、雲ひとつない青空になっていた。(既に晴れた後)		20			

表 9 の将然では YORU の 1 形式、表 10 の結果では TORU の 1 形式が選択されている。事態 β においては、機能重複が生じていないということである。

岡山方言については、事態 α の将然と事態 β の将然において機能重複の有無が異なっている。将然は、「直後に開始し得る局面に関連している現在の局面」と定義されるが (Comrie 1976: 64-65)、継続的な事態である事態 α の将然と、瞬間的な事態である事態 β の将然の間には差があ

ると考えられる。本研究では、岡山方言の持続体系では、事態 α における将然と進行の間の b （開始点）は曖昧であるが、事態 β における将然と結果の間の b/e （開始／終了点）は明確であると考ええる。

3.3 高知方言の持続体系における機能重複

本節では、高知方言の若年層の持続体系において、機能重複が観察されるかどうかを検証する。高知方言における調査概要は次の通りである。なお、アスペクトに関しては、方言区画による方言差は観察されなかった。

■方言区画（松丸 2017: 127）

土佐方言 / 幡多方言

■インフォーマント

高年層 16 名 / 中年層 14 名 / 若年層 20 名

まず、事態 α における調査結果は、次の通りである。

表 11 事態 α の将然におけるデーター高知方言・若年層一

Verb	Property	[α] Situation : Realis-Prospective	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回しているAがいた。(Aは走る直前)	11			9	20
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、フライパンに油をひき、トレーから肉を取り出し出しているAがいた。(Aは肉を焼く直前)	11			9	
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、空がどんより曇っていて、ジメジメしていた。(雨が降る直前)				20	
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、机の上の資料に目を通し始めているAがいた。(Aは作戦を考える直前)	11			9	

表 12 事態 α の進行におけるデーター高知方言・若年層一

Verb	Property	[α] Situation : Progressive	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、走っている最中のAがいた。(Aは走っている最中)	20				20
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、肉を焼いている最中のAがいた。(Aは肉を焼いている最中)	20				
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、雨が降っている最中だった。(雨が降っている最中)	20				
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、作戦を考えている最中のAがいた。(Aは作戦を考えている最中)	20				

表 13 事態 α の結果におけるデータ—高知方言・若年層—

Verb	Property	[α] Situation : Resultative	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、100 m 走を終えて休憩しているAがいた。(Aは既に走った後)		20			20
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、焼き終えた肉を皿へ移しているAがいた。(Aは既に肉を焼いた後)		20			
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、地面が濡れ、水たまりができていた。(雨は既に降った後)		20			
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、作戦会議を終えて資料を片付けているAがいた。(Aは既に作戦を考えた後)		20			

表 11 の将然、表 12 の進行では YORU の 1 形式、表 13 の結果では TORU の 1 形式が選択されている。事態 α においては、機能重複が生じていないということである。

次に、事態 β における調査結果は、次の通りである。

表 14 事態 β の将然におけるデータ—高知方言・若年層—

Verb	Property	[β] Situation : Realis-Prospective	YORU	TORU	TERU	n/a	info
座る	主体変化 意志的	朝礼前、教室に入ると、荷物を置いて、椅子を引き出しているAがいた。(Aは座る直前)	20				20
死ぬ	主体変化 非意志的	朝、玄関を出ると、ひどく痙攣しているネズミがいた。(ネズミは死ぬ直前)	20				
消える	主体変化 無生物	放課後、教室に入ると、ストーブの火がとても弱くなっていて、消えていつている様子だった。(火が消える直前)	20				
消す	主体動作 客体変化	放課後、教室に入ると、ストーブのスイッチに手を伸ばしているAがいた。(Aは火を消す直前)	20				
晴れる	自然現象	午後、部屋のカーテンを開けると、雨が上がっていて雨雲の隙間から太陽が見え始めていた。(晴れる直前)	20				

表 15 事態 β の結果におけるデータ—高知方言・若年層—

Verb	Property	[β] Situation : Resultative	YORU	TORU	TERU	n/a	info
座る	主体変化 意志的	朝礼前、教室に入ると、既に席に着いているAがいた。(Aは既に座った後)		20			20
死ぬ	主体変化 非意志的	朝、玄関を出ると、ネズミが1匹死んでいた。(ネズミは既に死んだ後)		20			
消える	主体変化 無生物	放課後、教室に入ると、点いているはずのストーブの火が消えていた。(火は消えた後)		20			
消す	主体動作 客体変化	放課後、教室に入ると、ストーブの火を消し終えて換気をしているAがいた。(Aは既に火を消した後)		20			
晴れる	自然現象	午後、部屋のカーテンを開けると、曇ひとつない青空になっていた。(既に晴れた後)		20			

表 14 の将然では YORU の 1 形式、表 15 の結果では TORU の 1 形式が選択されている。事態 β においては、機能重複が生じていないということである。

高知方言については、事態 α と事態 β において、機能重複は一切観察されなかった。高知方言の持続体系では、西日本諸方言アスペクトの基盤とされている YORU と TORU の機能対立が、依然として保持されているということである。

3.4 愛知方言の持続体系における機能重複

本節では、愛知方言の若年層の持続体系において、機能重複が観察されるかどうかを検証する。愛知方言における調査概要は次の通りである。なお、アスペクトに関しては、方言区画による方言差は観察されなかった。

■方言区画（山田 2017: 89）

尾張方言 / 西三河方言 / 東三河方言

■インフォーマント

高年層 16 名 / 中年層 27 名 / 若年層 47 名

まず、事態 α における調査結果は、次の通りである。

表 16 事態 α の未然におけるデーター愛知方言・若年層一

Verb	Property	[α] Situation : Realis-Prospective	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、スタートラインに立ち、手首足首を回しているAがいた。(Aは走る直前)				47	47
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、フライパンに油をひき、トレーから肉を取り出しているAがいた。(Aは肉を焼く直前)		15	14	32	
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、空がどんより曇っていて、ジメジメしていた。(雨が降る直前)				47	
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、机の上の資料に目を通し始めているAがいた。(Aは作戦を考える直前)		20	24	23	

表 17 事態 α の進行におけるデーター愛知方言・若年層一

Verb	Property	[α] Situation : Progressive	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、走っている最中のAがいた。(Aは走っている最中)		47	47		47
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、肉を焼いている最中のAがいた。(Aは肉を焼いている最中)		47	47		
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、雨が降っている最中だった。(雨が降っている最中)		47	45		
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、作戦を考えている最中のAがいた。(Aは作戦を考えている最中)		47	47		

表 18 事態 α の結果におけるデーター愛知方言・若年層一

Verb	Property	[α] Situation : Resultative	YORU	TORU	TERU	n/a	info
走る	主体動作	放課後、運動場に行くと、100 m 走を終えて休憩しているAがいた。(Aは既に走った後)		27	19	20	47
焼く	主体動作 客体変化	夕食前、台所に行くと、焼き終えた肉を皿へ移しているAがいた。(Aは既に肉を焼いた後)		17	16	29	
降る	自然現象	朝、部屋のカーテンを開けると、地面が濡れ、水たまりができていた。(雨は既に降った後)		11	8	36	
考える	心理	昼食後、会議室に入ると、作戦会議を終えて資料を片付けているAがいた。(Aは既に作戦を考えした後)		18	20	25	

表 16 の未然では、事態内容によってバラツキはあるものの、主に「その他 (n/a)」が選択さ

れているのに対し、表 17 の進行、表 18 の結果では、主に TORU と TERU の 2 形式が選択されている。事態 α においては、進行と結果で TORU と TERU の機能重複が生じているということである。

次に、事態 β における調査結果は、次の通りである。

表 19 事態 β の未然におけるデーター愛知方言・若年層一

Verb	Property	[β] Situation : Realis-Prospective	YORU	TORU	TERU	n/a	info
座る	主体変化 意志的	朝礼前、教室に入ると、荷物を置いて、椅子を引き出しているAがいた。(Aは座る直前)				47	47
死ぬ	主体変化 非意志的	朝、玄関を出ると、ひどく痙攣しているネズミがいた。(ネズミは死ぬ直前)				47	
消える	主体変化 無生物	放課後、教室に入ると、ストーブの火がとても弱くなっていて、消えていっている様子だった。(火が消える直前)		14	13	33	
消す	主体動作 客体変化	放課後、教室に入ると、ストーブのスイッチに手を伸ばしているAがいた。(Aは火を消す直前)		21	23	24	
晴れる	自然現象	午後、部屋のカーテンを開けると、雨が上がっていて雨雲の隙間から太陽が見え始めていた。(晴れる直前)				47	

表 20 事態 β の結果におけるデーター愛知方言・若年層一

Verb	Property	[β] Situation : Resultative	YORU	TORU	TERU	n/a	info
座る	主体変化 意志的	朝礼前、教室に入ると、既に席に着いているAがいた。(Aは既に座った後)		47	42		47
死ぬ	主体変化 非意志的	朝、玄関を出ると、ネズミが1匹死んでいた。(ネズミは既に死んだ後)		47	42		
消える	主体変化 無生物	放課後、教室に入ると、点いているはずのストーブの火が消えていた。(火は消えた後)		46	38	1	
消す	主体動作 客体変化	放課後、教室に入ると、ストーブの火を消し終えて換気をしているAがいた。(Aは既に火を消した後)		40	39	7	
晴れる	自然現象	午後、部屋のカーテンを開けると、雲ひとつない青空になっていた。(既に晴れた後)		47	41		

表 19 の未然では、事態内容によってバラツキはあるものの、主に「その他 (n/a)」が選択されているのに対し、表 20 の結果では、主に TORU と TERU の 2 形式が選択されている。事態 β においては、結果で TORU と TERU の機能重複が生じているということである。

愛知方言については、事態 α の結果と事態 β の結果において機能重複の度合いが異なっている。結果（結果状態 (resultant state)）は、「動作・変化が完了した後の持続的な状態」と定義されるが (Comrie 1976: 28)、継続的な事態である事態 α の結果と、瞬間的な事態である事態 β の結果の間には差があると考えられる。本研究では、愛知方言の持続体系では、事態 α における結果には痕跡の性質があるため、「動作・変化が完了した後の持続的な状態」と直結しづらいが、事態 β における結果には状態の性質があるため、「動作・変化が完了した後の持続的な状態」と直結しやすいと考える。

4. 結論

本節では、持続形式の機能重複における類型化を行い、各タイプがどのような場所に分布して

いるのかを可視化する。類型化では、YORU, TORU, TERU のような特定の持続形式や機能重複が生じている形式の数を考慮せず、事態 α と事態 β という枠組みの上で、どの相において機能重複が生じているかということを重視する。なお、本節で示す類型は、第3節において提示した方言データに限らず、本研究の調査対象とした22府県の方言データを全て含めたものである⁸。

4.1 機能重複の類型と地理的分布

本節では、22府県の方言データに基づいた機能重複の類型と地理的分布を示す。まず、表21に示すように、事態 α における機能重複の類型は、Aタイプ、Bタイプ、Cタイプの3タイプである。機能重複ありは「○」、機能重複なしは空欄で示す。

表21 事態 α における機能重複の類型

A			B			C		
PROSP	PROG	RES	PROSP	PROG	RES	PROSP	PROG	RES
	○		○	○			○	○
奈良県	- 南部方言		岡山県	- 岡山方言		大阪府	- 大阪方言	
三重県	- 北牟婁方言					京都府	- 山城方言	
兵庫県	- 摂津播磨方言					滋賀県	- 滋賀方言	
	- 淡路方言					奈良県	- 北部方言	
	- 但馬方言					三重県	- 北部方言	
	- 丹波方言						- 南牟婁方言	
鳥取県	- 東部方言					和歌山県	- 紀北方言	
広島県	- 広島方言						- 紀中方言	
山口県	- 山口方言						- 紀南方言	
愛媛県	- 愛媛方言					島根県	- 出雲隠岐方言	
香川県	- 香川方言						- 石見方言	
徳島県	- 徳島方言					愛知県	- 愛知方言	
岐阜県	- 飛騨方言					石川県	- 加賀方言	
						岐阜県	- 美濃方言	
						富山県	- 五箇山方言	
							- 呉東方言	
						長野県	- 南部方言	
						福井県	- 嶺南方言	
							- 嶺北西部方言	

表21より、Aは、進行において持続形式の機能重複が生じるタイプを示している。Bは、将然と進行において持続形式の機能重複が生じるタイプを示している。Cは、進行と結果において持続形式の機能重複が生じるタイプを示している。なお、将然において持続形式の機能重複が生

⁸ 西日本諸方言は、YORU, TORU, TERU を中心とした持続体系となっているが、和歌山方言の持続体系には、TORU と TERU に加え、=jaru, =taaru, =tcaaru などの持続形式が存在する。本研究における類型化では、特定の持続形式や機能重複が生じている形式の数を考慮しないため、和歌山方言も他の諸方言と同様に扱うが、このような個別方言特有の持続形式を含めた分析は、今後の課題である。

じるタイプと将然と結果において持続形式の機能重複が生じるタイプは存在しない。

次に、表 22 に示すように、事態 β における機能重複の類型は、C' タイプの 1 タイプのみである。機能重複ありは「○」、機能重複なしは空欄で示す。

表 22 事態 β における機能重複の類型

C'	
PROSP	RES
	○
大阪府	- 大阪方言
京都府	- 山城方言
滋賀県	- 滋賀方言
奈良県	- 北部方言
三重県	- 北部方言
	- 南牟婁方言
和歌山県	- 紀北方言
	- 紀中方言
	- 紀南方言
島根県	- 出雲隠岐方言
	- 石見方言
愛知県	- 愛知方言
石川県	- 加賀方言
岐阜県	- 美濃方言
富山県	- 五箇山方言
	- 呉東方言
長野県	- 南部方言
福井県	- 嶺南方言
	- 嶺北西部方言

表 22 より、C' は、結果において持続形式の機能重複が生じるタイプを示している。このタイプと事態 α における C タイプは同様の諸方言である。なお、将然において持続形式の機能重複が生じるタイプは存在しない。

一方、表 23 に示すように、持続形式の機能重複が生じていない方言の類型は、D タイプ、E タイプの 2 タイプである。

表 23 機能重複が生じていない方言の類型

D		E	
京都府	- 丹波方言	京都府	- 丹後方言
高知県	- 高知方言	鳥取県	- 西伯者方言
		石川県	- 能登方言
		富山県	- 呉西方言
		長野県	- 北部方言
		福井県	- 嶺北東部方言

表 23 より、D は、複数の持続形式が存在するが、形式間の機能対立が明確であるために、機能重複が生じないタイプを示している。E は、複数の持続形式が存在しないために、機能重複が生じないタイプを示している。

ここで、A-E タイプが、どのような分布を成しているのかについて、GIS による可視化を行う。図 5 に示すように、持続形式の機能重複が持続体系の変化プロセスにおける一過程であるとするれば、持続体系の変化が生じている場所は、非常に広範囲であることが分かる。

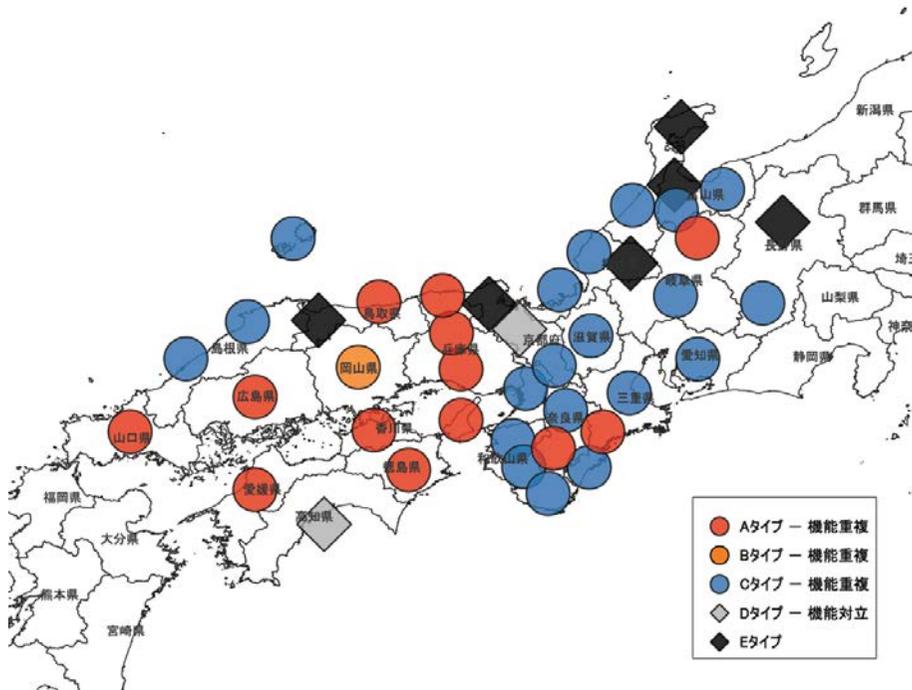


図 5 機能重複の種類と地理的分布

図 5 より、A-C タイプでは、持続形式の機能重複が生じているが、A タイプと B タイプは、近畿地方以西において地理的連続性に従っているのに対して、C タイプは、近畿地方以东において地理的連続性に従っていることが分かる。一方、持続体系の機能重複が生じていない D タイプと E タイプは、A-C タイプの周辺に分布しているという意味で方言圏論的である。長野県以东の東日本諸方言が、標準語と同様、TERU の 1 形式を使用する E タイプに該当することを踏まえると、持続形式の機能重複は、西日本諸方言において活発に生じていると言える。また、地理的連続性に従っておらず、A タイプが岐阜県北部、B タイプが岡山県、C タイプが島根県のような非連続的な場所に分布しているという現象も興味深い。このような現象に関しては、当該方言の内的変化の分析と道路情報や移動コストなどを加えた外的変化の分析が必要である。

A-C タイプのように、形式と意味の 1 対 1 の対応が不安定な状態を変化プロセスの一過程で

あるとすれば、これらの分布は、言語変化が生じている場所を示していると言える。一方、DタイプとEタイプのように、形式と意味の1対1の対応が安定した状態を変化プロセスの起点もしくは終点であるとするれば、これらの分布は、言語変化が生じていない場所を示していると言える。

4.2 考察

本稿では、持続形式の機能重複における類型と地理的分布について、YORU, TORU, TERUのような特定の持続形式や機能重複が生じている形式の数を考慮しなかったが、これらを考慮した類型化と可視化は、今後の重要課題のひとつである。

特定の持続形式を考慮すると、AタイプとBタイプに該当する方言の多くには、YORUとTORUが存在しており、進行もしくは将然と進行において機能重複を生じさせているという共通点を持つ。また、Cタイプに該当する方言の多くには、TORUとTERUが存在しており、進行と結果において機能重複を生じさせているという共通点を持つ。YORUとTORUが西日本諸方言の伝統的な持続形式、TERUが東日本諸方言の伝統的な持続形式であるとする、AタイプとBタイプの機能重複は、意味拡張のような内的変化によって生じるが、Cタイプの機能重複は、言語接触のような外的変化によって生じると考えられる。ただし、近畿中央方言のTERUに関しては、近年の言語接触によって発生した持続形式であるとは考えづらいため、歴史的資料による分析も並行的に行っていく必要がある⁹。

一方、Dタイプに該当する方言には、YORUとTORUが存在しており、形式間の機能対立が明確であるという共通点を持つ。持続形式の機能重複においては、Dタイプに該当する方言が、変化プロセスの起点となっている可能性が高い。また、Eタイプに該当する方言には、TORUもしくはTERUが存在しており、標準語と同様、1つの持続形式が、進行と結果を標示するという共通点を持つ。通方的に見れば、TORUのみが存在している方言は、YORUが消滅した後の持続体系を成している可能性が高い。

最後に、言語変化のプロセスが、安定 >> 不安定 >> 安定であるとする、日本語諸方言の持続体系における変化プロセスは、D = 起点、ABC = 変化過程、E = 終点として、D >> ABC >> Eのような順序であると考えられる。無論、ABCの変化過程における様々な現象の追跡調査と分析は、今後の重要課題のひとつであるが、持続形式の機能重複における類型がABCであるという事実は、変化過程において、内的変化と外的変化が複雑に交錯していることを示唆している。

略号

NOM: nominative (主格) / NPST: non-past (非過去) / PROG: progressive (進行) / PROSP: prospective (将然)

⁹ 京阪式アクセントを指標として、大阪市、京都市およびその周辺部で使用されている方言のことを「近畿中央方言」という。近畿中央方言は、江戸時代後期までの中央語であったことから、他の諸方言よりも歴史的資料が豊富にあり、通時的研究も活発に行われてきた(中井2002, 金水2006, 青木2010)。

/ RES: resultative (結果)

参考文献

- 青木博史 (2010) 『語形成から見た日本語文法史』 東京：ひつじ書房。
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 日高水穂 (2008) 「方言形成における「伝播」と「接触」」『方言研究の前衛：山口幸洋博士古希記念論文集』 425-442. 富山：桂書房。
- 方言文法研究会 (編) (2017) 『全国方言文法辞典資料集 (3) —活用体系 2—』 2014-2018 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 「日本語の時空間変異対照研究のための『全国方言文法辞典』の作成と方法論の構築」 (課題番号：26244024・研究代表者：日高水穂) 研究成果報告書。
- 井上文子 (1998) 『日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて—』 東京：秋山書店。
- 鴨井修平 (2020) 「西日本諸方言におけるアスペクト体系のバリエーション—YORU・TORU・TERU の記述を中心に—」『言語記述論集』 12: 223-240.
- 鴨井修平 (2023) 「西日本諸方言におけるアスペクト形式の文法化—2つの動機に基づく待遇化プロセス—」 博士論文, 同志社大学。
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』 15: 48-63.
- 金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』 東京：ひつじ書房。
- 小島裕将 (2017) 「岡山県岡山市方言」方言文法研究会 (編) (2017), 105-114.
- 小林隆 (2014) 「あいさつ表現の発想法と方言形成—入店のあいさつを例に—」小林隆 (編) 『柳田方言学の現代的意義 あいさつ表現と方言形成論』 99-124. 東京：ひつじ書房。
- 国立国語研究所 (編) (1999) 『方言文法全国地図 第4集—表現法編 1—』 東京：財務省印刷局。
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 東京：ひつじ書房。
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』 東京：ひつじ書房。
- 松丸真大 (2017) 「高知県宿毛市方言」方言文法研究会 (編) (2017), 127-142.
- 中井精一 (2002) 「上方およびその近隣地域におけるオル系「ヨル」・「トル」の待遇化について」『国語語彙史の研究』 21: 236-252.
- 野間純平 (2014) 「大阪府方言」方言文法研究会 (編) 『全国方言文法辞典資料集 (2) —活用体系—』 102-111. 2009-2013 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」 (課題番号：21320086・研究代表者：日高水穂) 研究成果報告書。
- 大西拓一郎 (2016) 『ことばの地理学 方言はなぜそこにあるのか』 東京：大修館書店。
- 大西拓一郎 (2023) 『方言はなぜ存在するのか ことばの変化と地理空間』 東京：大修館書店。
- 津田智史 (2013) 「日本語方言アスペクトの研究」 博士論文, 東北大学。
- 津田智史 (2023) 「テンス・アスペクトと方言地理学」小林隆・大西拓一郎・篠崎晃一 (編) 『方言地理学の視界』 127-143. 東京：勉誠出版。
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in philosophy*. New York: Cornell University Press.
- 山田敏弘 (2017) 「愛知県新城市作手方言」方言文法研究会 (編) (2017), 89-96.

Changes and Geographical Distribution of Aspect in Japanese Dialects

KAMOI Shuhei

Konan Women's University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This study discusses the variation and geographical distribution of aspect systems in Japanese dialects. First, these systems are classified based on the aspectual functions of the forms =*joru*, =*toru*, and =*teru*. The functional overlap among these aspectual forms is then quantitatively analyzed. Accordingly this overlap is treated as a phase in the process of aspectual change, and the distribution of the aforementioned forms is visualized using GIS (Geographic Information System). Based on these findings, the study contributes to the linguistic geography research question: “Where does language change occur?”

Keywords: Japanese, dialects, aspect, language change, geographical distribution